

# コロナパンデミックと新自由主義

危機の中から教育の未来を切り拓くために

佐貫 浩

さぬき ひろし  
1946年生まれ  
法政大学名誉教授  
著書 『学力・人格と教育実践』(大月書店、2019年)  
『現代をどうとらえ、どう生きるか』(新科学出版社、2016年)  
『道徳性の教育をどう進めるか』(新日本出版社、2015年)  
『学力と新自由主義』(大月書店、2009年) など

多くの人がとが、未曾有のコロナパンデミックの展開のなかで、新自由主義が、この危機を拡大し、この危機に対処する人類の力を奪っていることを、率直な言葉で表明し、訴え、批判し始めている。それは人類が、今その進歩と危機克服を妨げている主犯として新自由主義をとらえ、その現実と正面から対峙しようという構えを生み出したこととして画期的なことである。

しかしあらためてまわりを見回すとき、はたして今、自分が生きている世界の独特の歴史的な性格、巨大な困

難、人類が直面している危機の深さ、日々多くの人間の命が失われている惨状の本質に、この新自由主義という概念を介して迫るという認識の仕方は、一体どれぐらい同意を得ているのだろうか。第二次世界大戦の原因を資本主義と帝国主義という社会科学の概念で把握することで、戦後世代はこの戦争の本質を科学的に捉えることが大衆的規模でできるようになった。それと同じ重さを、新自由主義という概念が、現代に対して持つと考えられないだろうか。

## 一 新自由主義とは何か

もちろん、新自由主義の概念に関しては、論争もある。ここでは私自身の新自由主義理解を提示してみたい。

第一に、それは、国家の経済力をも上回る巨大な富と、国家をも超える資本と生産のネットワークを手にし、世界経済への強力な統制力を獲得した段階のグローバル資本が、世界市場での利潤獲得戦略を推進するために、国民国家権力の再掌握を企図し、その結果、このグローバル資本による「国家権力の回復<sup>(1)</sup>」の下で遂行される国家政治の特質を指すものとなった。

その把握の特徴は、「新自由主義の本質を現代の支配階級が権力関係を再建するための戦略として捉えていること、労使関係にそくしていえば、資本の側の労働に対する階級的支配を再建・強化するためのヘゲモニー・プロジェクト(戦略的・主導的企図)として捉えている<sup>(2)</sup>」ことにある。なお、この視点からすれば、新自由主義を「市場化」の側面だけから把握し、国家的管理や統制の側面を見ない認識の仕方は、今日の強権的な新自由主義国家の展開を統一的に把握できないものとなる。教育政

策としてみれば、それは新自由主義政策を学校選択制などの市場主義的公共性という点でのみ把握し、その国家主義的、統制主義的、価値管理的な側面を見ない一面的な理解となる。また、新自由主義が、世界を支配するグローバル資本の世界経済と世界政治におけるメタ権力の形成を背景として生みだされてくる論理は、ウルリッヒ・ベックが説得的に描き出した<sup>(3)</sup>。

第二に、その国家政治の経済戦略上の最も基本的な性格は、戦後の西欧型福祉国家に対して、それが経済市場に対する政治的介入であり、資本の利潤追求の自由への制限であるとして、その介入(国家による資本への課税、雇用に対する規制、企業活動への規制、各種の生存権保障のための福祉の拡大、国民への手厚い富の再配分等)を廃止しないし「規制緩和」し、逆に資本に対する国家支援を拡大し、資本の自由、市場の自由を取り戻すという点にある。自治体行政や公共的な権利保障制度も、民営化や自治体の自主財源の削減などによって解体され、各自が自己責任で獲得すべきサービス商品と化し、安心して生きるための共同の仕組みが後退していった。この側面は、フリードリッヒ・ハイエクやミルトン・フリードマン<sup>(4)</sup>の経済理論などによって、世界に広められていった。ナオ